

農夫の勘違い

マタイ21:33~46 / 李正雨師

韓国のことわざに「人生とは手ぶらで来て手ぶらで帰るものだ」という言葉があります。皆様もこの言葉をよく理解しておられると思います。特にこの言葉は、先輩の牧師たちは、誰よりもよく分かっておられるでしょう。私は牧師になってから、自分のものは何もないということが分かりました。教会も、牧師館も、事務室も、自分のものではありません。韓国の場合には、車も牧師のものではありません。牧会のために教会又は教団が提供してくれるもの、貸してくれるものです。牧会が終わったら、このすべてのものを全部返却しなければなりません。次の牧師と牧会のためにすべてのものを返すのです。それで、牧師たちは、手ぶらで来て手ぶらで帰るという言葉を経験的に分かっていると思います。先輩の牧師先生、そうですね。

もちろん、この言葉は牧師だけに限られている言葉ではありません。皆が手ぶらで来て、手ぶらで帰るからです。私たちが自分のもののように使っているものは、時が来ればもう使えなくなります。この世の空と地、空気、水、自然などと私たちは、必ず別れることとなります。それで私は、私たち人間がこの世のすべてのものを借りて使っていると思います。人生の長さが長ければ長いままに、短ければ短いままに、借りて使っているのです。完全な私のものではありません。私たちが永遠に所有できるものは、何もないからです。

あるお金持ちがいました。世の中で指折りのお金持ちだったので、多くの人に羨まれました。しかし時が来ると、お金持ちもこの世を去ることになりました。お金持ちは、死ぬ前に神様に祈りました。「神様、お願いが一つあります。私は一生懸命働いて集まった財産がけっこうあります。これを置いて死ぬのは、とても残念だと思います。だから、財産の一部でも持って天国に入らせてください。」神様は、この祈りを聞いてくださったので、お金持ちは、自分の財産を皆売り払って世界で一番大きいダイヤモンドを一つ買いました。そして、喜んでそのダイヤモンドを持ち、天国に向かっていきました。天国の扉が開き、ペトロがこのお金持ちを迎えました。そして、お金持ちが大切に握っているダイヤモンドを見て、ふっと笑いました。ペトロの案内に従って、お金持ちは天国の中に入り、そこでお金持ちはへこたれてしまいました。道端にある石くれが全部ダイヤモンドだったからです。

私たちは、天国に何も持っていきません。持っていけるとしても、この世のものは、天国では全く役に立ちません。だから究極的に、自分のもの、自分の所有物というものは、一つもないと思います。今は自分のものだと思うかもしれませんが、天国に行くときは、一つも持って行くことができないからです。今日の福音書の言葉も、これに関係があると思います。今日の福音書で、イエス様は主人のものを奪おうと思っている農夫の話が語られます。そして、このことがどれほど愚かで危険なことかを教えてください。今日の福音書33節の言葉から見てみましょう。「もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。」

今日の福音書での主人は、ブドウ園を作ります。そして、ブドウ園に必要なものをすべて備えます。垣を巡らし、搾り場を掘ります。見張りのやぐらを立て、ブドウ園を守ることができるようにします。これらすべてを備えてから、主人はブドウ園を農夫に貸して、旅に出ます。ここで農夫がしたことは、何もありません。すべてのことは主人がしたことであり、農夫は、ただすべて建てられたブドウ園を借りられただけです。ところが、収穫の時になると、農夫は邪悪な考えを抱きます。収穫を主人に与えようとしなかったのです。もちろん農夫の分が全くないわけではありません。ブドウを収穫するために、農夫は一生懸命働いたでしょう。水をやり、枝を下し、虫を取ったでしょう。しかし、一生懸命働いたとしても、ブドウ園が自分のものになるわけではありません。あくまでも農夫は、ぶどう園を貸していただいた人にすぎません。働いた対価を受ける人であり、ぶどう園の主人ではないということです。

それにもかかわらず、農夫は主人に収穫を与えようとしませんでした。主人は収穫を収めるため、僕たちを送りましたが、農夫たちは彼らを袋だたきにし、石で打ち殺します。主人は他の僕を送りましたが、彼ら

も同じ目に遭わせました。最後に、主人は自分の息子を送ります。自分の息子なら敬ってくれるだろうという思いでした。しかし、農夫たちは主人の息子を全く敬ってくれませんでした。むしろこれを主人の相続財産を奪う機会だと思いました。だから彼らは、息子までも殺します。ぶどう園を自分のものにしようとした欲のためでした。

イエス様のこのたとえは、神殿の祭司長とファリサイ派の人々に向けた言葉でした。神殿は、神様のものであり、民のためのものでした。しかし、祭司長とファリサイ派の人々は、神殿を自分のものにしました。当時のイスラエルには、サンヘドリンという自治組織がありました。サンヘドリンの委員たちは、神殿と民の中に起こっていることのすべてを決めましたが、委員のほとんどは、祭司長とファリサイ派の人々と長老たちでした。おそらく今日の福音書でイエス様の言葉を聞いている彼らは、サンヘドリンの委員だったと思います。イエス様は農夫のたとえを通して、神殿と民を自分勝手に動かそうとするサンヘドリンの委員たちの過ちを指摘しておられます。サンヘドリンの委員が一生懸命働いとしても、神殿も、イスラエルも、彼らのものではありません。すべてのものの主人は神様です。彼らは、ただ働く農夫にすぎません。これを勘違いしてはいけません。すべてのものの主人は神であること、これを忘れてしまったら、すべてのことは、主人のご意志に変わります。これが今日の福音書の言葉です。

私たちがこの世で使っているもの、飲んで食べているもの、着て乗っているもの、自分の体と精神、自分の信仰と人生まで、私たちは自分のものだと思います。自分が働いてお金を稼いでいて、自分が買って、自分が選んでいるからです。しかし、神様がこのすべてを私たちに許さなければ、私たちは何も得ることができません。きれいな空気、清い水、美しい自然、新鮮な食品など。毎日触れているので、当然だと思っているものですが、このすべてには神様の御心と摂理があるのです。私たちの健康な体、働くことができる環境、私たちの家庭や職場、平和な日常生活、教会と信仰まで。すべてが私のもののようで、私が選んだようですが、私のものではありません。時が来れば、私たちはこのすべてと別れて去ることになるからです。完全な私のものではありません。私たちは、このすべてのものを神様から借りただけです。

そのため、私たちは今日の福音書の農夫のように勘違いをしてはいけません。自分が何かを決めることができるからといって、大きな影響力があるからといって、一生懸命働いたからといって、神様から貸していただいたものを自分のものだと思っははいけません。イエス様は42節でこう言われました。「イエスは言われた。聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』」家を建てる者ほど、建築に必要な石について詳しく知っている人はいないでしょう。家を建てる者は、自分の建築のために石を選ぶ権利、捨てる権利があります。しかし神様が望まれるなら、彼らが必要ないと思って捨てた石も、隅の親石になることができるようにしてください。私たちの目には、これらのことが不思議に見えますが、神様はこのようなことをなさるでしょう。

だから、私たちは神様がすべてのものの主人であることを認めなければなりません。農夫のように自分のものだと思ったり、自分のものにしようとしたりしてはならないのです。使徒パウロはガラテヤの信徒への手紙2章20節でこう言います。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」クリスチャンは、自分の人生を自分のものだとは言いません。イエス様が自分の中に生きておられるからです。それで、私たちのすべては、自分のものではなく、イエス様のもの、神様のものなのです。私たちは、ただこれを貸していただいて生きているだけです。そして時が来れば、私たちは必ず神の国に入ることができるでしょう。死の力も、悪魔の誘惑も私たちを妨げることはできません。私たちの中にイエス様が生きておられるからです。神様が皆様の主人になってくださいますように。皆様のすべてを導いてくださるよう、主の御名によって祈ります。アーメン